

書訣

240
44

上編

071094-001-6

240-44

書訣 上編第1-3卷, 下編第1卷

前田 黙鳳/著

M42-43

CED-0589



書訣

上編第一卷

240

44

2116

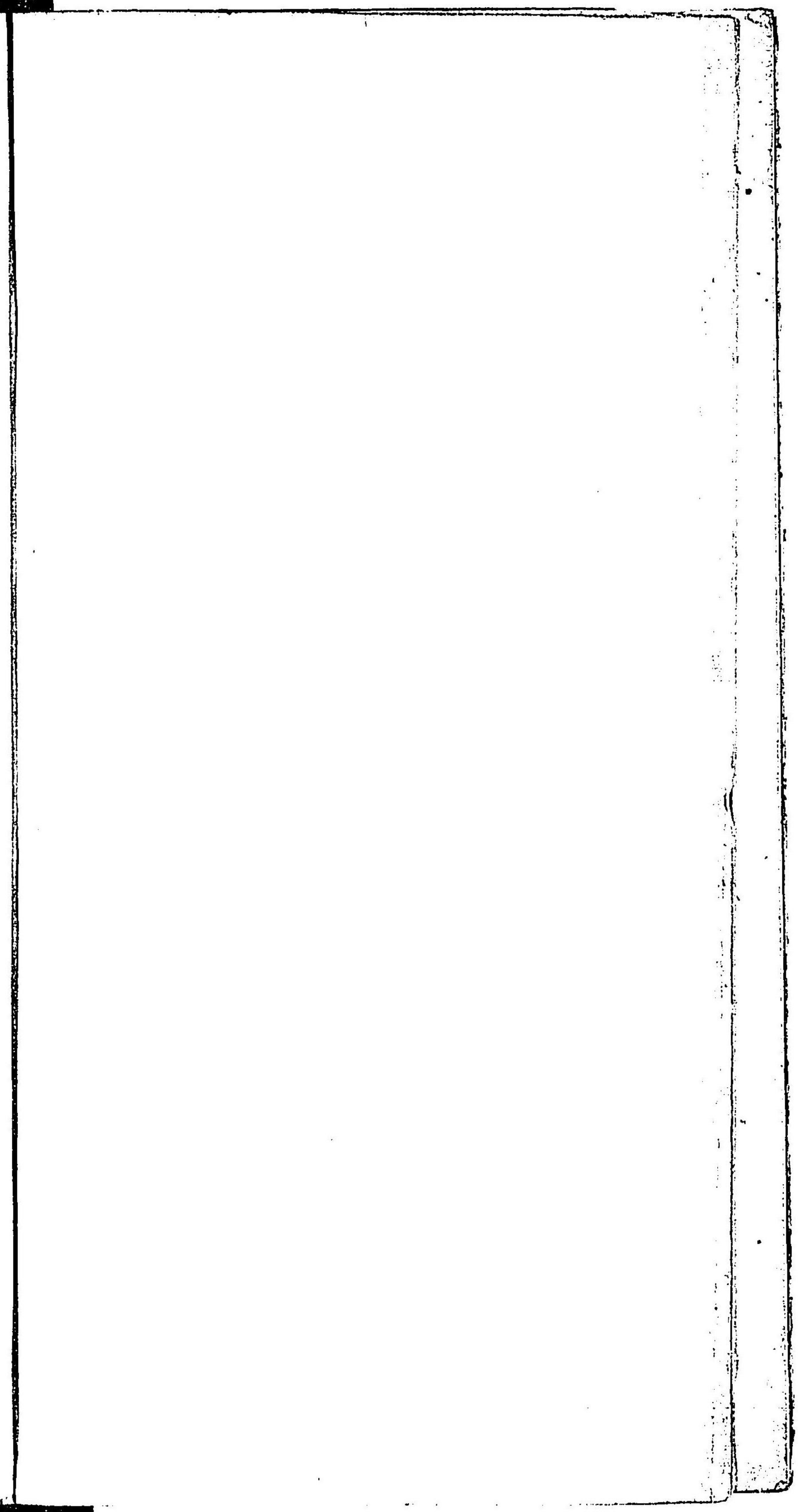
44

書訣

上編第一卷

默鳳道人著

全



書 訣

點鳳道人田圓述

發 端

頃日七條鶯亭君が未訪サレテ言ハル、ニ、私ハ元來書癖ノ者デ何ニ
 トカレテ書學ヲシテ盛シナラシメ、聊カ社會ニ貢獻シクイト常ニ念
 フテ居ルノデスガ、幸ニ近時書ノ必要ヲ感スル人ガ漸次増加シ、殊ニ
 六朝ノ書風ハ大キニ人ノ耳目ヲ惹クコトニナリ、今後倍世ニ擴張セ
 ラル、エト、信ジマス、就テハ此ノ書風ノ速成法即チ初學ノ人ニ
 早合點ノ行ク様ヲ方法ヲ御考案ヲ願ヒマス、此事タル實ニ我ガ文藝
 上ノ一進歩ヲ圖ルノデスカラ、強テ才賴ニスルトノ懇請ニテ、遂ニ余
 ガ淺學ヲ省ミ、其需ノニ應ズルコトニナリクノデ有リマス、
 我田ニ水ヲ引クト云フ譯デハ無イガ、六朝以上ノ書法ハ益世ニ盛
 ニ行ハルニ相違ナイト想フ、其所以ハ此程ノ日本人(雜誌及ヒ報知新
 聞ニヒ一寸述ベレ通り、唐以後ハ二王即チ王羲之王獻之ノ書ガ頻リ

發端

明治
 42 3 11
 內交

ニ持テ雜ヤサレテ、我

朝ニ於テモ書ヲ學ブ人ハ、二王以上ノ善書ハ無キモノ、様ニ思フテ居テ、然ルニ今日ニ傳リテ居ル二王ノ書ト稱スルモノハ、唐以後ノ人ノ臨書ヲ鏤刻シタモノデ、其最モ善キモノハ唐人ノ臨書デ有ルガ、其臨本モ再三再四ノ重刻デアアル、其次ギハ金元及明人ノ臨本ニテ是亦夕再三ノ重刻ニ係レモノガ多イ、故ニ真ノ二王ノ書ハ固ヨリ無キノミナラズ、唐以後ノ臨本モ右ニ述ブル如ク再三再四ノ重刻デ有ルカテ、僅カニ形體ノ幾部分ハ存シテ居ルトシテモ、肝心ノ書法ノ主眼トスル所ノ氣韻トカ筆力トカ云フモノハ殆ント滅シテ居ル、其コデ、明末ニ至リテ、追々古碑ヲ學ブエトテ首唱スル人ガ出テ、何ンデモ漢魏六朝等ノ時代ニ彫刻サレタ金石文、即チ鐘鼎ノ銘ヤ、碑碣等ノ文字ヲ搜リ、之ヲ學バネバナラヌ、若カラザレバ真ノ古人ノ筆意ヲ知ルコトガ出来ヌト云フ事ヲ論シ、明末清初ニ於テハ、之ヲ學ンダ人モ有リタノダガ、其人ハ極メテ少數ニテ加之ニ清初ニハ天子ガ董其昌ノ書

ヲ非常ニ愛シ、遂ニ一般ニ之ヲ用フルコトニ成リタモノダカラ、此等ノ妨害ヲ受ケテ、六朝以上ノ書ハ盛ンニ行ハレナカッタノデス、然レニ乾嘉ノ間ニ至テ、考證學ガ勃興シ、隨テ學者ハ金石文ヲ研究スル様ニナリ、茲ニ始メテ六朝以上ノ書ハ漸次世ニ行レル様ニナリ、近來ニ至リテ、其盛ヲ見ル様ニナリタノデス、如此ク三百年餘モ起リシト欲ハテ起リガリハ古人ノ筆意即チ古法ト稱スルモノハ、今日實際ニ之ヲ研究スル事ガ出来ル様ニ成リテ、東亞文藝ハ一大進運ガ來リハクノダカラ、今後倍々擴張セラル、ニ相違ナイコトト想ヒマス、六朝書ト云フモ一様デハナイ、種々字體ノ異ナルモノモ有ルガ、概シテ言フトキハ、此時代ハハ分ヨリ楷書ニ移ル中間ニ位スル文字デ有ル、故ニ唐以下ノ楷書トハ結體ニ於テハ格別ノ相違ハ無イガ、用筆即チ點畫ノ作方ニ於テハ大ニ異ル所ガ有リマス、然レテ六朝時代ニ於ケル古碑ノ數ガ何程有ルカト云フニ、造象記ナドヲ算スルトキハ限りハ無イガ、先ヅ數ナレモノ計リカ三百餘モ有リマス、其中ニテ何

ガ善イカト云フニ、劉宗ノ懸龍顏碑、梁ノ瘞鶴銘、北魏ノ鄭義碑等ガ最
モ名高キモノトナリテ居ル。之ニ次グモノハ鄭忠道墓誌銘、根法師碑、
張猛龍碑ナド、其他數十種アルガ、此等ノ事ハ、追テ時機ヲ俟テ別ニ
述フルコトニシマス。

本論

本立而道生ト論語ニ在ルガ、古今東西ヲ通ジテ動カサル格言アリ、
然テノ學藝モ、然テノ事業モ皆根本ヨリ修メテ成就シタリ、然ルニ我
國從來ノ教授法ヲ視ルニ、此ノ根本即チ原理ヲ秘傳トカ、秘術トカ、稱
シテ容易ニ授ケナイ、武術デモ茶デモ琴デモ三味線デモ、第一第二第
三ノ免狀ヲ得ケル後ニ其藝術ノ根本的原理ヲ授ケルガ例ノ様
ニ成リテ居ル、此弊ハ習字ニモ有ルノデス、實ニ善クナイ事デ有ル、故
ニ今此ノ弊習ヲ破リ、然テ根本的原理ヨリ授ケル事ニ任クイト思ヒ
マス、近頃ハ何ノ學藝ヲ問ハズ、速成ト云フ事ガ流行シテ居ルガ、速成
ハ即チ根本的原理ヲ先キニ修ムヨリ他ニ好キ道ハ有ルモ、如何ン

トナラバ、其根本ヲ先キニ知得スルカラ、末葉ノ事ハ随テ速カニ理解
スルコトガ出来ル、

書學ニ於テノ根本的原理ハ何ニグト云フニ、第一ニ先ツ筆法ヲ知得
スル事ガ即チコレデ有ル、翰林粹言ニ

得形體不若得筆法、

又々晉ノ元帝ハ

妙有用筆、用筆得法、於書何有。

ト説レテ居ルガ、此用筆ト云フハ筆ヲ運用スルノ方法ニテ筆法ト云
フモ亦同シコトデ、ツマリ用筆筆法トモニ筆ヲ遣フ方法デアリマ
ス。此法ヲ會得スレバ自然善書ガ作レルノデアル、即チ形體ヨリハ運
筆ノ方が大事デアリマス。然ルニ從來ノ習字法ハ言フマデモ無ク今
ノ教授法モ多クハ形體ヨリ先キニ授ケルカラ、トウモ善書ガ出来ナ
イ。其レハ根本ヲ後チニシテ末葉カラ學ブカラデアリマス。然テハ其
根本的原理ナル運筆ノ方法ハ何ウ云フモノデ有ルカト云フニ、魏ノ

鐘繇ノ言ニ

多力豊筋者聖。無力無筋者病。

此ノ多力豊筋トハ、一點一畫ノ内ニ筋骨豊カニ力多ク有ルコトヲ古
來書ニ於テモ画ニ於テモ一點一畫トモニ筆力ノ充實シテ居ルモノ
ヲ善書善画ト稱スルノデス。故ニ画法ニ於テモ骨法用筆ト云フモノ
カ画ノ根本的原則トナリテ居ル。無力無筋トハ其及對テ一點一畫ト
モニ力ナク筋骨豊カナラザル者ハ、人ハ人ニシテモ健全ノ人デハ無
イ、恰モ病人ノ如キモノゾ有ル。書モ亦タ然リデ。書ハ書デモ善書トハ
云ハレナイノデス。今ノ人ハ形體ノミヲ學ンデ居ルカウ、多クハ病人
ノ如キ書ヤ画ヲ作ル。此事ハ漸次改善シテ國光ヲ増進スルコトヲ勉
メネバナリマス。イ、

其次トハ變化ト云フコトガ有ル。姜堯章ノ書譜ニ

一點一畫皆有、三轉、一波一拂、又有、三折。

又タ孫過庭ノ書譜ニハ

一畫之間、變起伏、于鋒杪、一點之内、殊衄挫、于毫芒。

トアリ。画法ニハ一筆有數頓トアル。一筆有數頓トハ一筆ノ内ニモ五
六ノ頓挫ヲセシメルト云フ事デ。孫過庭ノ一畫之間、變起伏、于鋒杪ト
云フト同ジデス。鋒杪毫芒トモニ筆鋒ニテ一畫ヲ作ルニモ筆鋒ヲ數
クビ起伏セシメルト云フ事デアル。又タ一畫有三轉トハ一畫ヲ作ル
ニ筆鋒ヲ三クビ轉變セシメルト云フコトデス。尚ホ後ノ項ニ於テ圖
ヲ以テ詳細ニ説キマス。
右ニ述ブル筋骨ト變化トガ運筆ノ主眼デ有テ、亦タ書画ヲ作ル根本
的原則デ有リマス。何故ニ筋骨ト變化トガ根本的原則トナリテ居ル
カト云フニ、諸君ガ歴史上ヲ知ラレ、如ク書ノ起リハ、今ヲ距ル大約四
千五百年計リ前、黃帝ノ世ニ蒼頡ト云フ人ガ有テ、其人ガ天地間ノ萬
象ヲ觀察シテ、始メテ文字ヲ制シタノデ。象形ガ即チ書ノ本デ有ル。言
ヲ換ヘテ云ヘバ、古代ノ書ハ即チ古代ノ画デ有ル。其画ガ書ノ本トナ
リ而シテ漸次今日ノ書ニ變化シタノデ有ル。其二三ノ例ヲ示サバ、



馬馬馬馬馬馬馬馬

魚魚魚魚魚魚魚魚

水水水水水水水水

右ノ馬ト魚トハ形ナシ其マ、馬レ、水モホク水ノ流動レテ居ル形状
デ、書ノ本ハ斯ク天地間ニ生動レテ居ル事物ヲ寫シタノデ有ルカク、
生動ト云フ事ケ固ト意中ニ存レテ居ル、ソコデ其レガ又ク自然ノ道

理デ筆鋒ニ顯レ、故ニ書ハ古ヘヨリ生動ヲ主サド、筋骨ト變化ト
ガ根本的⁰原則トナリテ居ル⁰デ有リマス、之ヲ我邦人ノ書ニ就テ言ヘ
ハ、古クハ空海逸成⁰、近クハ物祖米池大雅⁰ノ如キ善書ヲ以テ稱セラレ
テ居ル人々ノ書ハ、其形體ハ何ウデ有ルト云フニ、素人ノ目ニハ決レ
テ善ク觀ヘ無イデアラフガ、其レヲ善書トシテ世ニ尊崇サレ居ルノ
ハ、全ク右ニ述ブレる筋骨ト變化トガ完備レテ書ノ根本的⁰原則ニ合フ
テ居ルカラデアアル殊ニ空海逸成⁰ノ書ハ支那デモ手本トシ學ンデ居
ル人モ有リマス、

字美觀、則、不古、初見之、則使人甚愛、次見之、則得其不到、古人處、三見之、
則偏傍、點、畫、不合古者、益在、目矣、字不美觀、必古、初見之、則不甚愛、再見
之、則得其到、古人處、三見之、則偏傍、點、畫、亦歷歷⁰在、目矣、
コレハ明ノ王世貞ノ言デアアルガ學者ハ此心掛クガ肝要デアアル
以上ニ述ヘレモノニテ、書ノ根本的⁰原理原則ハ既ニ讀者諸君ニ了解セ
ラレタト思ヒマス、元來文字ハ支那ニ於テ制シタモノデ有ルガ、我國

モ朝鮮モ古來之ヲ用ヒテ各其國字トナリテ居ルハ恰モ歐米ニ於ケル
横文ノ如キテ名ハ漢字ト稱スルモ其實ハ東亞全體ノ文字デア
我國史國典ハ言フ迄モ無ク恐レ多クモ

御歴代ノ尊師モ皆コノ文字ヲ用ヒサセラレ且ツ文字ハ現今ノ事
ヲ記ス計リテ無ク過去ノ事ヲ知ルニ大ナル必要ガ有ル今日之ヲ廢
他ノ文字ヲ用フルト云フコトハ到底言フベクモ實際ニ行フ事
ノ不可能ナルハ智者ヲ俟タズシテ之ヲ知ルコトガ出来ルデアラウ殊ニ
近年歐米諸邦ニ於テモ漢文ヲ研究スル人ガ漸次増加シ就中獨英ガ
尤モ盛シニテ既ニ英國デハミッドホルト云フ人ハ五經ヲ譯シレツクハ
十三經ヲ半ハ譯シタト云フコトヲ有ル又ク或ル學者ハ漢文ヲ十年
餘研究シテ結果文學上ノ文字トシテハ世界中テ漢字ニ越ユルモノ
ハ無ク漢字ハ本ト象形ニ起リ義ヲ主トシテ製サレクモノユエ古今
東西發音ヲ異ニスルモ意義ニ於テハ毫モ殊ルコトガ無ク故ニ數千
年前ノ事モ今日ソノ書ヲ見ルトキハ直ニ之ヲ知ル事ガ出来ル又ク

東西發音ヲ異ニスルモ書ヲ以テ往復スルトキハ數千里外ノ事モ坐
ナカラニシテ互ニ相知ル事ガ出来ル然ルニ歐洲ノ字ハ古來發音ヲ
寫スニ止ルモノユエ僅ニ數百年前ノ事ニテモ其間ニ於テ發音ガ變
化シテ居ルカラ古言ヲ知ラザル者ニハ半バモ解スル事ガ出来ヌ是
レ則テ漢字ガ文學上ノ文字トシテ世界ニ超絶シテ居ル所以デ有ル
ト云フ説ヲ唱ヘテ居ルサウデスガ異文國ノ學者デスラ如此キデア
ル況シテ古來國字トナリテ居ル我邦人ニ於テ倍コレヲ講究シテ學
ノ増進ヲ圖ルハ國家ニ盡ス當然ノ義務デアリマセウ

近時東亞文藝ニ漸次盛運ニ向ヒ説文會談書會書道會書話會等續々
設ケラレテ斯道ノ研究ヲスルト云フ現象ハ我文藝上大キニ喜ブベ
キ事ニテ亦ク當サニ斯ク無ケレバナラヌノデ有ル殊ニ今日ノ文藝ハ
一國ノ文藝ニ非ズレテ世界ノ文藝テ有リマス書ハ東亞ニノミ限ラ
レテ居ルト思フハ識見ノ狭イ話デアル世界ノ文運ノ進ムニ隨ニ歐
米ノ學者ニレテ之ヲ學ブモノ漸次増加スルハ自然ノ數デ有リマ

ス、故ニ斯道ニ志アルモノハ益勉勵シテ海外ノ學者ト優劣ヲ競ヒ、我
國光ヲ大ニニ發輝セシメル決心ヲ以テ學ハル、コトヲ企望シマス、

執筆

執筆ハ松身ノカタヲ指頭ニ集注シテ、シツカリト筆ヲ把ツト云フ一事
ニ在ルノデス、別ニ六ツカシイコトモ何ニモ無イ、人各天性ヲ異ニシテ居
ルカラ、其性ニ随ヒ、各自筆ヲ執リヨイ様ニ把ツガ宜イノデス、蘇東坡
ノ言ニ

把筆無定法、要虛而寬。

トアルガ之ハ道理ニ合フヲ説ク有ル、松身ノカタヲ指頭ニ集注シテ筆
管ヲ把ツトキハ自然ニ指實シテ掌ハ虚クナル、又ソ盧雋ガ臨池訣ニ
「大指、撮中指、歛第二指、拒名指、令掌心虚、如握卵」
先ヅ此ガ普通ノ執リ方ヲ有ル筆ニ十分力ノ入ル様ニ把ツニハ二指
以上筆管ノ上ニ懸ケネバナラス、一指ノ懸ケタノデハ力ガ入ラヌ、又
三指ヲ懸ケルモ妨ゲナイノデアラン。

臨池訣ニ云フ執筆ハ

下圖ノ如キデアランガ、

筆管徑七八分

以上ノ大筆

ハ第二第三

圖ノ如クセネ

ハ執ルコトガ出来ス、

併シ何ヲ把ツテモ筆

ニ十分ニ力ヲ入レ

バ宜シイノデス、昔レ

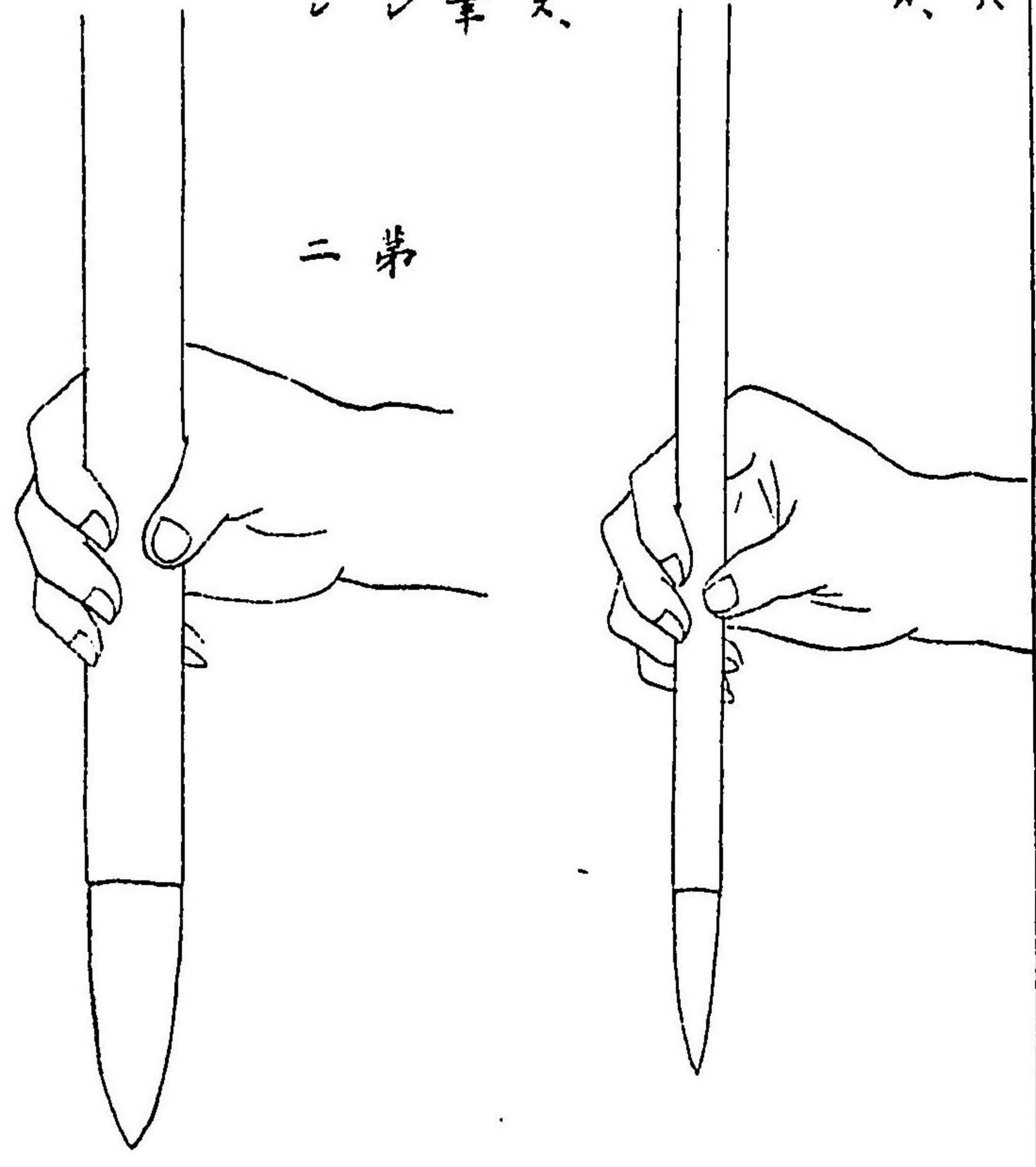
王獻之ガ幼少

ノ時ニ一生

懸命ニ手習

フ仕テ居テ所ヲ

二第



王羲之が竊タニ
背ヨリ其筆ヲ試
ニ奪ハントシ

夕所ガ其筆ガ
獻之ノ手ト共
ニ上リテ之ヲ
奪アコトガ出来

ナカツタ其レテ我之ガ此兎ハ他日書名ヲ天下ニ博スルデ有ラフト
言フタトアルガ其レハ松身ノカタ指頭ニ集注セシムシツカリト筆
ヲ執テ居タカラ手ト共ニ筆ガ上リテ奪ハレナカツタノデス

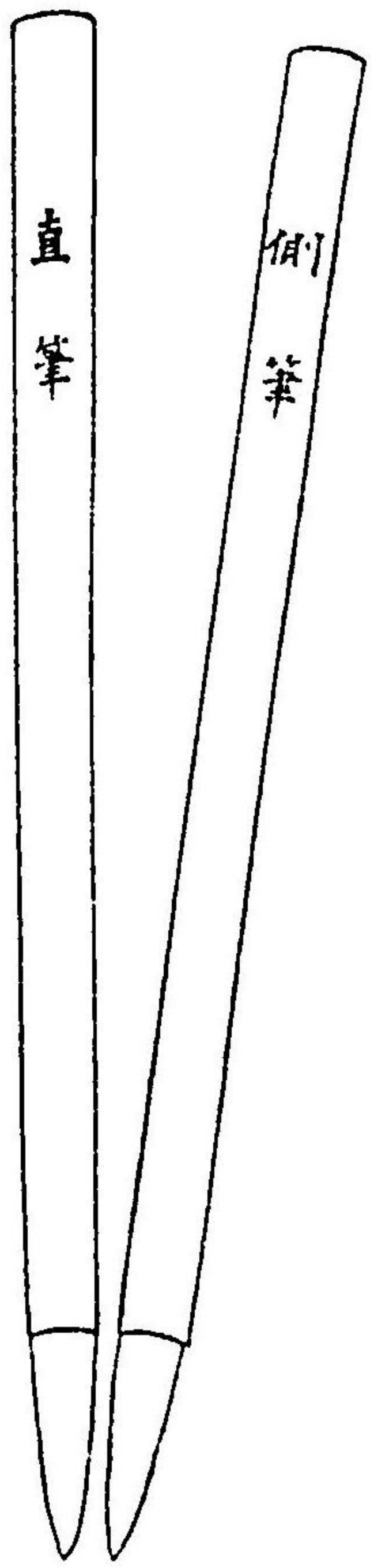
直筆ト側筆

筆ヲ運用スルニハ直筆ト側筆ト二様ノ別ガ有リマス、劉有定ガ論執
運法ニ

篆直分側。直筆圓。側筆方。用法有異。而執筆初無異也。其所以異者。不過

遺筆用鋒之差變耳。

トアリテ。篆書ノ如キ圓筆ノモノハ直筆デナケレバ作レコトガ出来
ナイガ。ハ分及ビ楷書ノ如キ方筆ノモノハ側筆デナケレバ善ク作レ
ナイ。此方圓ハ一點一畫ノコトヲ言フノデ藏鋒ノモノヲ圓筆ト称レ
出鋒ノモノヲ方筆ト曰フノデス。尚ホ藏鋒出鋒ノ事ハ後ニ述ブル
コトニレテ直筆ト側筆トヲ圖デ示サバ。



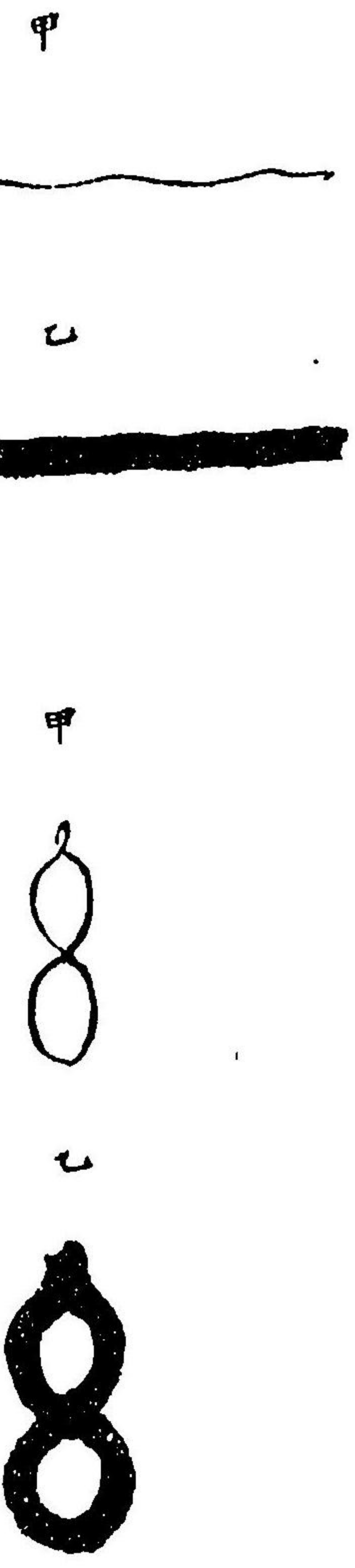
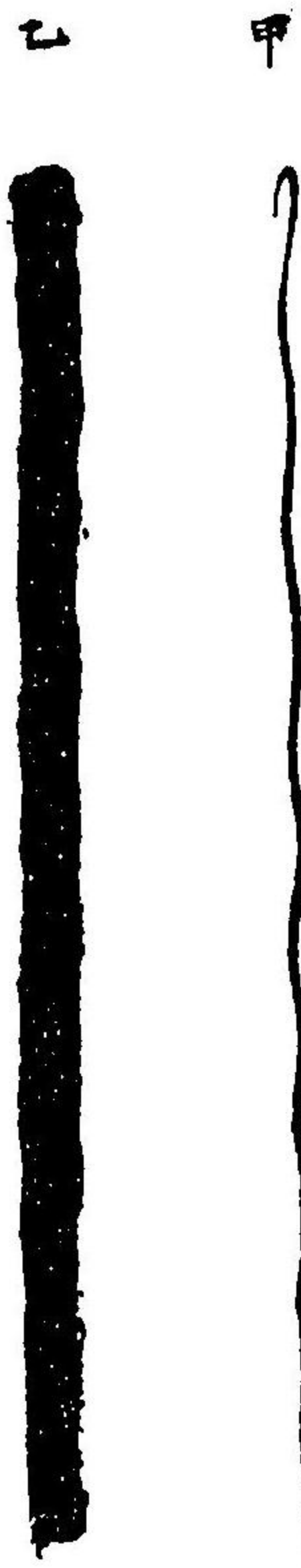
右ノ如ク。直筆ハ筆ヲ真直クニ、側筆ハ少レ側ケテ執フノデス。縦畫ヲ
作ルニハ少シク右ニ側ケ、横畫ヲ作ルニハ前へ即チ自己ノ身體ノ方
へ側ケルノデス。方筆ノモノハ如此クシテケレバ善ク作レナイノミ

執筆 直筆ト側筆

ナラズカモホク十分ニ入ラナイ、從來我國ノ人ハ懸腕直筆ト計リ称シテ、何ンデモ蚊デモ直筆デナケレバ成ラヌ事ト心得テ、恣テノ文字ヲ直筆テ作ルカラ、或ハ轉折ノ處ニ瘤ノ如キモノガ出来タリ、或ハ霸氣ヲ生ジタリ、スルノデス、殊ニ六朝ノ楷書ハ、恣テ側筆テ作ラレテ有ルカラ、學者ハ茲ニ注意セラレタヒ。

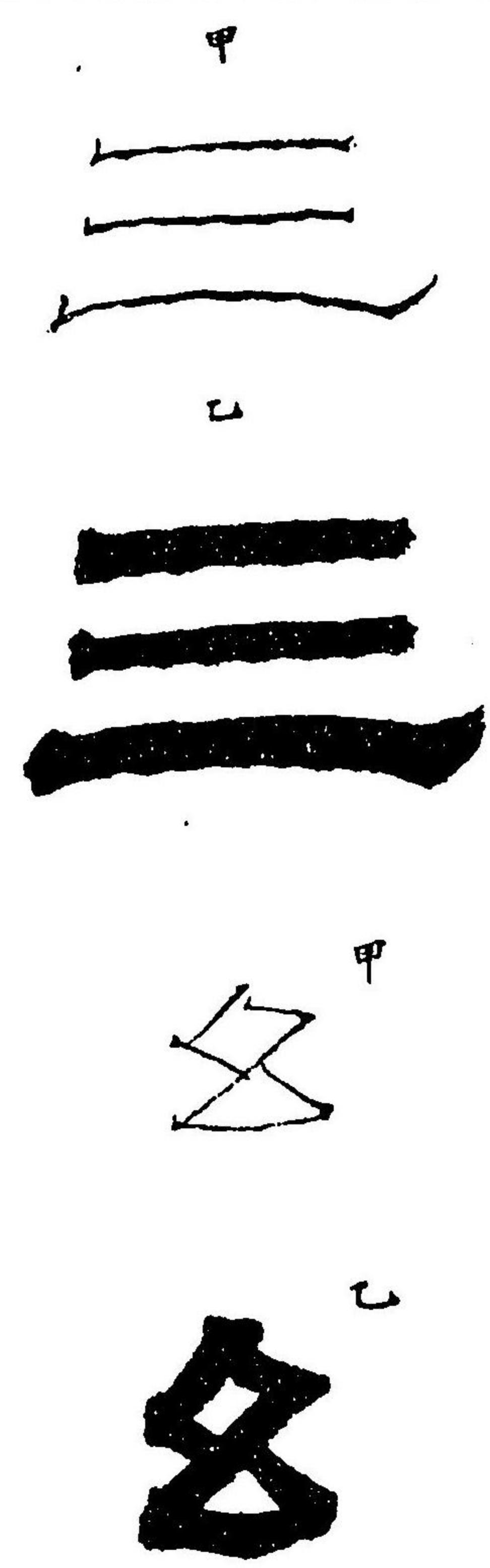
骨法

前ニ續述セシ如ク書ニハ何體ヲ問ハズ骨法ト云フ事ガ最モ肝要デアル、故ニ此編ハ楷書ノ部デアルナレドモ、學者ノ参考ノ為ニ篆書ヨリ六朝楷法ニ至ル骨法ヲ載セマス。



此ハ直筆ニテ篆書ハ皆テ此法ヲ用ヒ、甲ハ即チ骨法ニテ、其骨法ノ如ク、縦畫ハ筆鋒ヲ少レ下ヨリ入レ、横畫ハ少レ右ヨリ入レテ引出ストキハ、起筆ニ稜角ヲ生ゼズ、殆ンド圓形ヲ為スヲ以テ之ヲ圓筆ト云ヒ、又テ起筆ニ筆鋒ヲ藏メテ外ニ顯サシムルヲ以テ藏鋒ト云フノデス、古條モ亦タ多ク此法ヲ用ヒテ居ル。

骨法



此ハ側筆ニテハ分ハ多ク此法ヲ用ヒテ居ル起筆ニ於テ筆鋒ノ外ニ露レテ居テ殆ント方形ヲ為シテ居ルカラ方筆ト稱レ又夕出鋒或ハ露鋒トモ言フノデス而レテ下畫ノ止筆ガ斜ノニ上ニ向フテ躍出シテ居ルノハ起筆ニ於テ

起

如此ク筆鋒ヲ少シ左ニ向ツテ入レテ側筆ニテカヲ用ヒテ引出ヌハ勢ヒ止筆ハ斜ノニ上ニ向ツテ袖カネバナラヌ是レ全ク自然ノ道理ニシテ態ト止筆ヲ斜ノニ上ニ向フテ躍出セシムルノデハナイ其レカラ六朝ノ楷書ニ至リテ左ノ如ク變化シタ



此モ前ニ述フル如ク側筆ヲ作ルモノニテ即チ方筆出鋒ノ文字デア
ルガ前ノ八分ト異ル所ハ起筆ノ筆鋒ガ左ニ向ハナヒノミジ有ル此
起筆ハ

骨法

起

如此ク筆鋒ヲ入レテ打出スエエニ止筆ハ

止

如此ク下ニ向ケ抽カネバナラヌ様ニ自然ニナルノデ有ル併レ六朝ノ楷書ハ悉ク止筆ノ筆鋒ヲ下ニ向ツテ抽カネバナラヌト云フ法ハ無イノデス起筆ノ筆鋒ノ入レ塩梅ニヨツテ往ニ止筆ヲ上ニ向フテ抽クコトモ有ル要スルニ自然ニ任セルガ宜イノデ有リマス但ダ起筆ニハ十分ノ注意ヲ要セネバナラヌ如何ントナラバ起筆ニ於テ第一ノ筆カヲ生ゼレバ次ノ轉變ニ依テ其カヲ増加レテ行クノデアルカラ

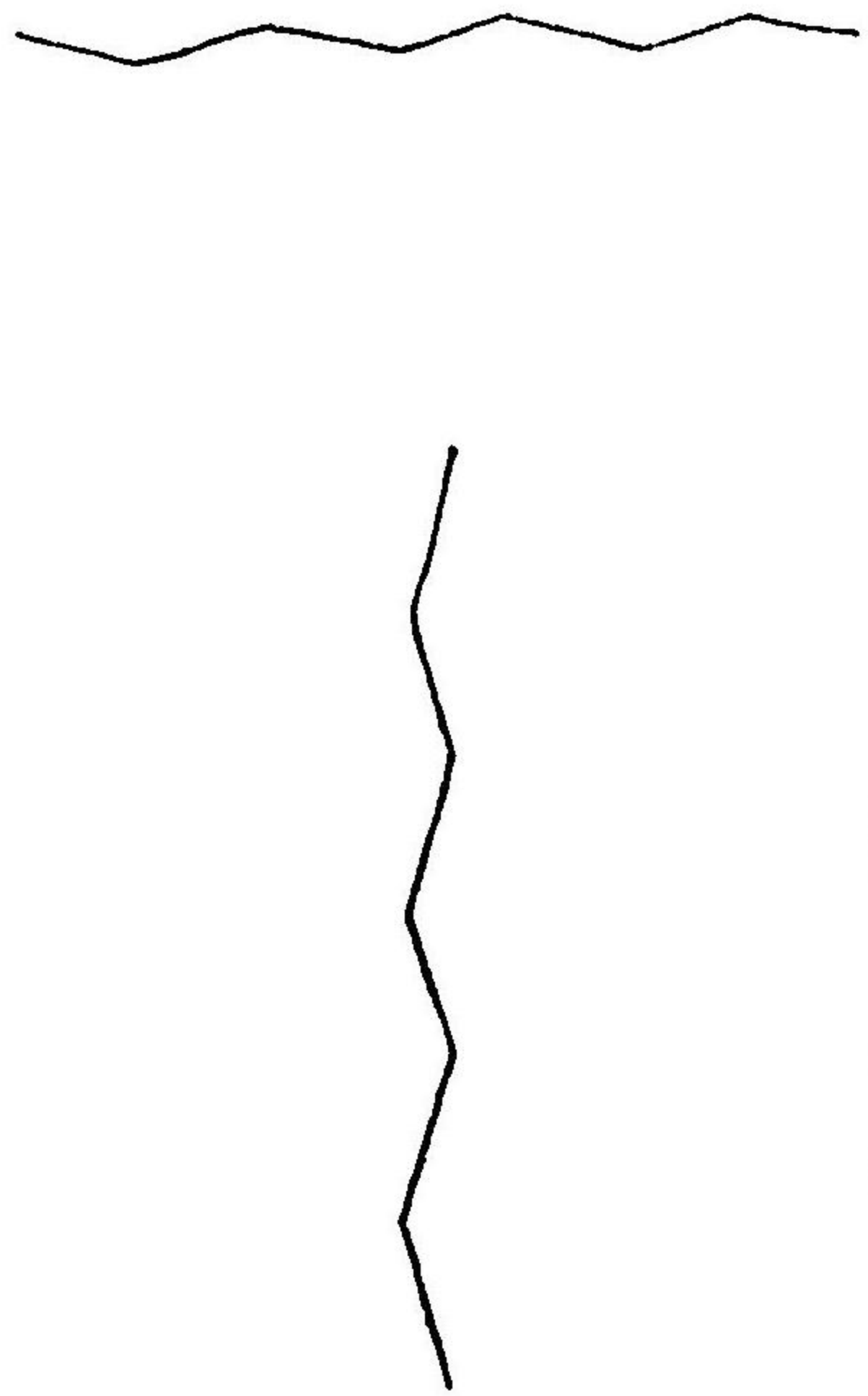
變化

前項ノ骨法ト左ニ載スル運筆ノ變化トガ相待テ用ノ為スモノニテ骨法ガ有テモ變化ガ無レバ其用ヲ為サズ變化ガ有テモ骨法ガ無レバ亦テ其用ヲ為サナイノデアアル此ノ二ツノモノガ前ニ述ベシ如ク書ノ根本的原則トナリテ居ル故ニ之ヲ善クスル者ハ能書トナリ否ラサル者ハ忌筆ニ終ルノデ有リマス

右ハ書法ニ曰フ一畫三轉ノ圖デアアル其三轉ト云フ事ノ解レ易キ様ニ轉處ヲ急ニ作リレモノエエ實際ニ畫ヲ作ルトキハ此意ヲ以テ緩ニ作ルノデアリマス

骨法變化

右ハ画法ニ曰フ一筆数頓ノ圈ニテ孫過庭ノ書譜ニ云フ一畫之間變起
 伏于鋒杪ト同意ト是亦夕實際ニ畫ヲ作ルトキハ此意ヲ以テ緩ニ
 作ルノデス但ダ書ハ一畫三轉ニ限リ画ハ一筆數頓ニ限ラレテ居ル
 ノデハ無イ書ニ於テモ篆書古隸等ノ如ク畫ヲ長ク作ルモノハ一畫
 ノ内ニ筆ヲ數クビ轉ゼレメネハナラヌ又夕楷行艸ニ於テモ尺以上ノ
 大字ヲ作ルルハ一筆數頓ガ必要デアル画モ亦夕畫ノ短キモノハ一



畫三轉ノモノガ多クアル蘭葉ノ如クハ即チ一畫三轉デ有ル書画共
 ニ畫ノ大小長短ニヨツテ之ヲ應用スルノデ有リマス但ダ画ニ於テ
 ハ多ク筆鋒ノ變化ヲ外ニ顯スモノデ有ルガ書ハ之ヲ内ニ藏シテ外
 ニ顯スコトガ極メテ少クイ併シコレモ一概ニハ言ハレヌ画ニ於テ
 モ竹幹ノ如キハ筆鋒ノ轉變ヲ内ニ藏シテ外ニ顯ハサヌ書ニ於テモ
 古隸及艸書ノ如キハ轉變ガ多ク筆畫外ニ顯レハ分デハ石門頌楷書ヲ
 鄭道昭ノ論經書詩ナドハ筆畫外ニ顯レテ居ル處ク多クアル之ヲ要ス
 ルニ東亞ノ書画ハ其原流ヲ同フレテ居ルカラ運筆ノ原則モ亦夕一
 致レシ居ルノデス故ニ古來書ヲ善スル人ハ亦夕多ク画ヲ善クシテ
 居ル支那ノ蔡邕諸葛亮羲之獻之等皆テ画ヲ善クシテ傳ヘテアル
 其レカラ東坡米芾子昂瑞圖等皆然リテズ我國ノ雪舟元悅華山霞
 樵竹田松翁其他ニモ段々アルガ書ノ運筆ヲ了解スルトキハ画ヲ作
 ルニ易ク画ノ運筆ヲ了解スルトキハ書ヲ作り易イ故ニ画法ニ画ヲ
 作ルハ須テ書ヲ作ル如クスベシト云フアル又夕皆特画ニ有名

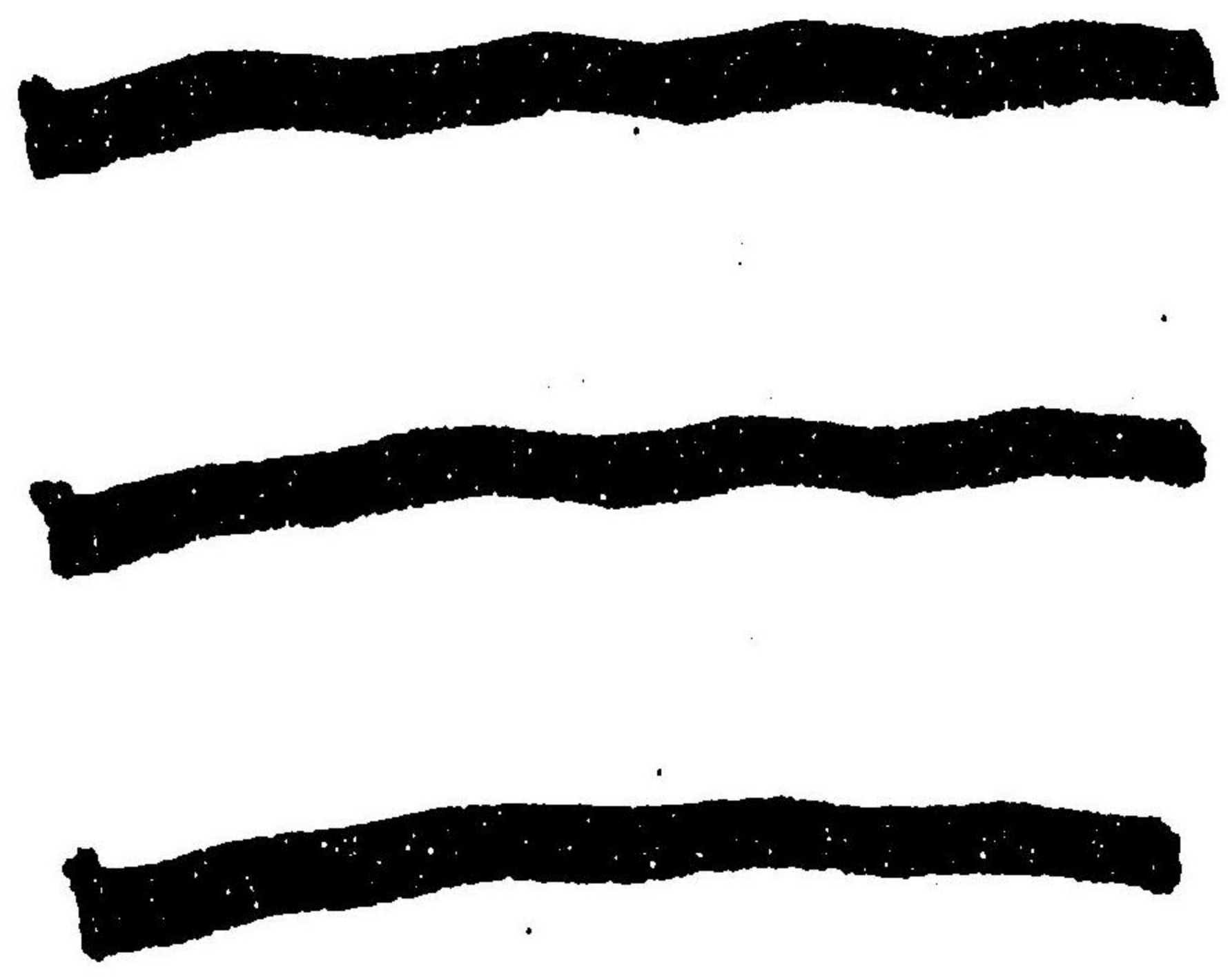
變化

廿三

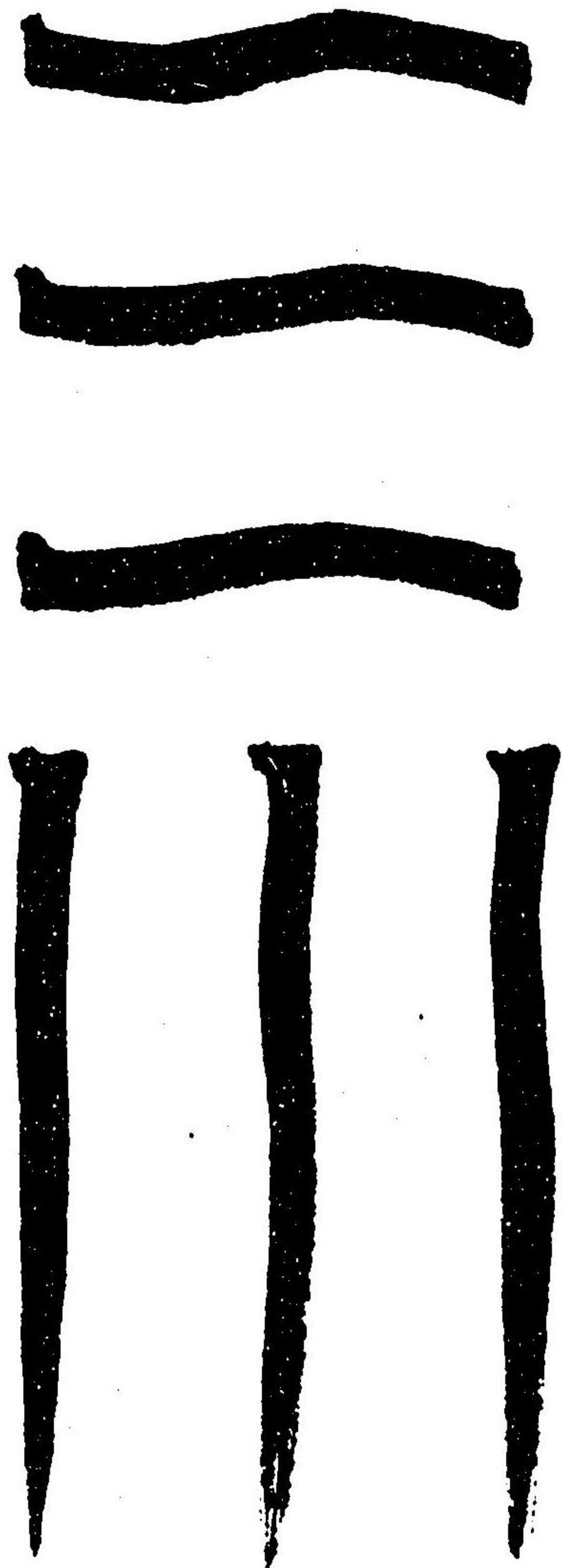
ナル陸探微ハ衛夫人筆陳圖ニ依リ吳道玄ハ張旭ノ筆法ヲ授リテ共ニ大牛ニ画ヲ進メト云フアルガ、筆陳圖モ筆法モ皆ナ運筆ノ方法ニテ、骨法ト變化トニ在ルノゾス、故ニ更ニ筆鋒轉變ノ緩急ヲ左ニ



此ハ一畫數轉テ有ルガ學者ハ先ヅ之ヲ研究シ給ヘ、轉變ノ急ナルモノヨリ入りテ後ヲ緩テルモノニ移ルノデアル、實際者ニハ第一ニ載スル如キ急ナルモノハ無イガ、如此キ急ナルモノヨリ漸次緩ナルモノニ移ラネバ運筆ノ趣味ガ譯ラナイデセウ、此運筆法ヲ習熟スルトキハ數尺ノ長畫ヲ作ルモ畫ノ中間ニ於テ筆力ノ衰ヘルコトハ無キノミナラズ轉變スル毎ニ倍筆力ヲ増ス、故ニ學者ハ十分



ニ研究セラレタイ、而レテ双紙ニハコノ骨法ガ載セテ有リマスカラ、其骨法ノ如ク筆鋒ヲ起シ、且ツ其細線ノ如ク筆鋒ヲ轉變セシメ、意ノ如ク出来ル様ニ成リタラ、更ニ白紙ノ上ニテ研究練磨スルガ宜イ、又夕双紙ノ上ニ直ニ習フモ薄ク紙ヲ双紙ノ上ニ載ヒテ習ハル、モ學者ノ随意デス、



右ハ一畫三轉ニテ、此モ双紙ニ骨法カ載セテ有リマスカラ、急ナルモノヨリ緩ナルモノニ移リ、十分研究セラレタイ、以上二種ノ運筆ガ善ク出来ル様ニナルト、更ニ次ノ點畫ニ移ルノデス、

點畫

前ニ述ベレ如ク、六朝以前ノ學者ハ皆點畫ノ運筆ヲ能ク究メテ居レ、右ノ時代ニ能書ノ多イノハ、全クコレニ原因レテ居ルノデス、衛夫人ノ筆陳國ニ昔レ秦ノ丞相李斯ハ周ノ穆王ノ書ヲ見シ、其多力豊筋ナルニ興嘆シテ、自今ノ書ノ無骨ナルヲ患テ大ニ勉勵シタ、又夕漢ノ尚書蔡邕ハ鴻都ト云フ處ニ碣ヲ見シ、其書ノ出羣ナルニ驚キ、遂ニ十句ニ其處ヲ去ラズ、之ヲ學ブト云フガ、實ニ其原ニ達スル人ト謂フモノハ、少イノデアル、故ニ今筆妙七條ヲ述ベテ子孫ニ貽ストアリマヌガ、其七條ナルモノハ、

- 一 如千里障雲、隱々然其實有形、
- 如高峯墜石、碣々然實如前也、

點畫

ノ 陸断犀象
 乙 百鈞弩發
 一 萬歲枯藤
 一 有浪雲奔
 一 勁弩筋節

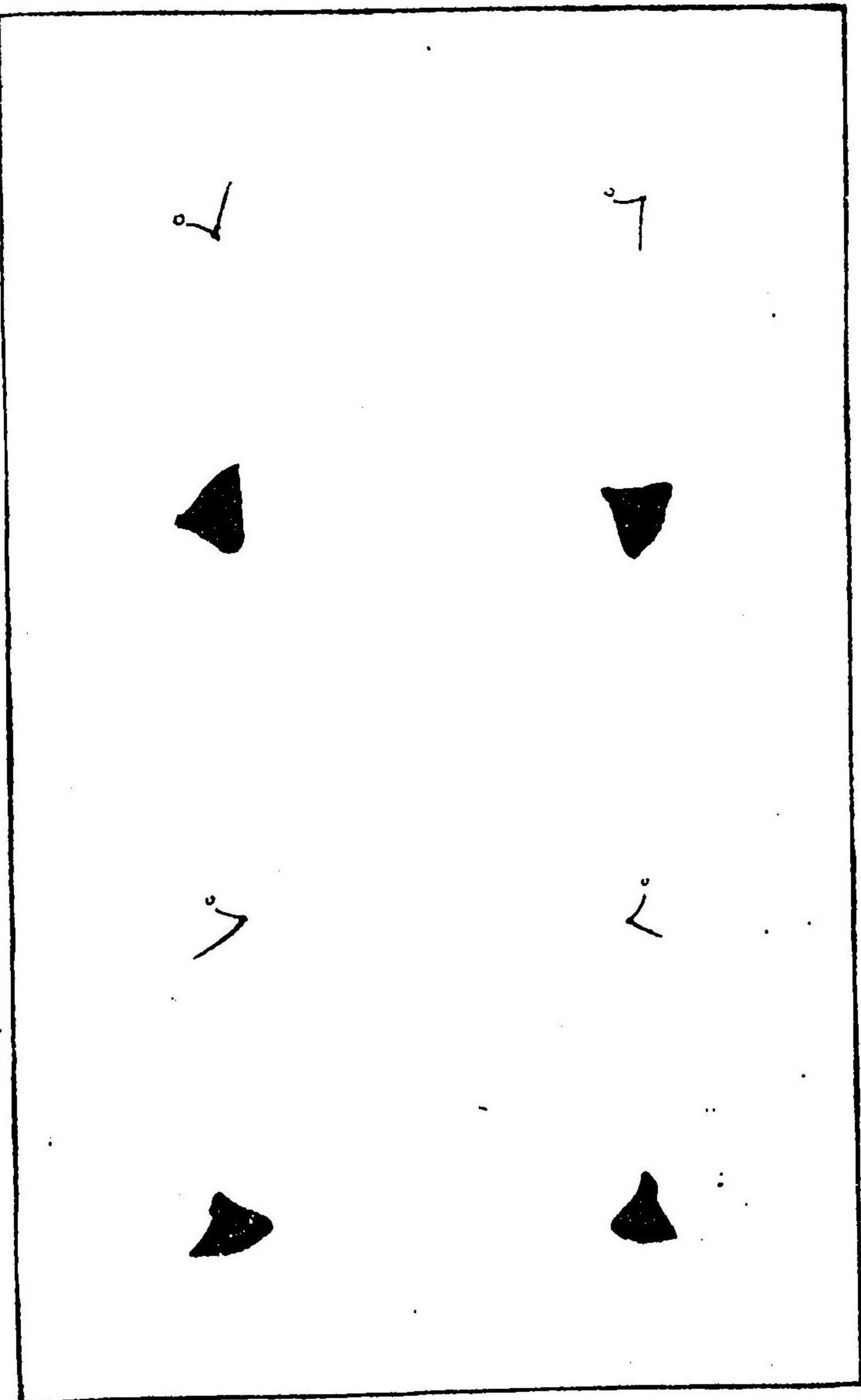
如此ノ皆點畫ノ形情ヲ説キ示シタルモノデ有ル、次ギニ王羲之ノ
 一 如長舟之截小渚、
 一 如春筍之抽寒谷、
 一 如大石之當衝、
 一 落筆峨峨、如長松之倚船柱、若欲倒也、復似百鈞之弩初張、
 一 彎、如角弓之張、
 一 要如壯士之屈臂、
 等恣ヲ點畫ノ形情ヲ説キ、諸君ニ定メテ承知セラル、デ有テアケ智
 永ノ永字八法ト稱スルモノモ同ジク點畫ノ作方ト其筆情ヲ説トク

モノデ其説ノ歸スル所ハ皆前ニ述ベシ骨法即チ筆力ト變化ニ外ナ
 ラヌ、ジアル、右ノ如ク秦漢以後隋ニ至ル學者ハ皆點畫ノ運筆ヲ先
 ニシテ分ニ研究シテ事ヲ譯ル、蓋シ書ハ點畫ヲ集メテ體ヲ結ブモノ
 エ工、點畫ヨリ先キニ學ブハ當然ノ順序デアリマス、マシテ點畫ノ運筆
 ガ自在ニ出來ク上ハ體ヲ結ブニ於テ別ニ難キコトハナク、指物師ガ書
 棚ヲ造ルニモ先ヅ其大小ノ木柁ヘテ然ル後ニ之ノ組立ルト同
 ジデアアル、若レ大小方圓直曲各種ノ木柁ヘガ善ク出來テ居ナイトキ
 ハ其書棚ハ立派ニ出來上ラナイノミナラス、之ヲ組立ルニ大ナク骨
 格折レル、文字ノ體ヲ結ブニ於テモ此ト同ジク點畫ノ運筆ヲ十分習熟
 セズシテ體ヲ結ブトキハ、其文字ガ立派ニ出來ザルノミナラス、結體
 ニ困難ヲ感ズルモノデアリ、故ニ學者ハ前項ニ掲ケリ變化ト左ニ載
 スル點畫トハ十分ニ習熟セテ、コトヲ企望シマス、
 却説右ニ述ブレ衛夫人王羲之等ノ點畫ナルモノハ、畢竟各自ニ研究
 シ筆法ヲ其子孫若クハ門弟ニ傳授シタマデノモノデ、殊ニ衛夫人王羲之

點畫

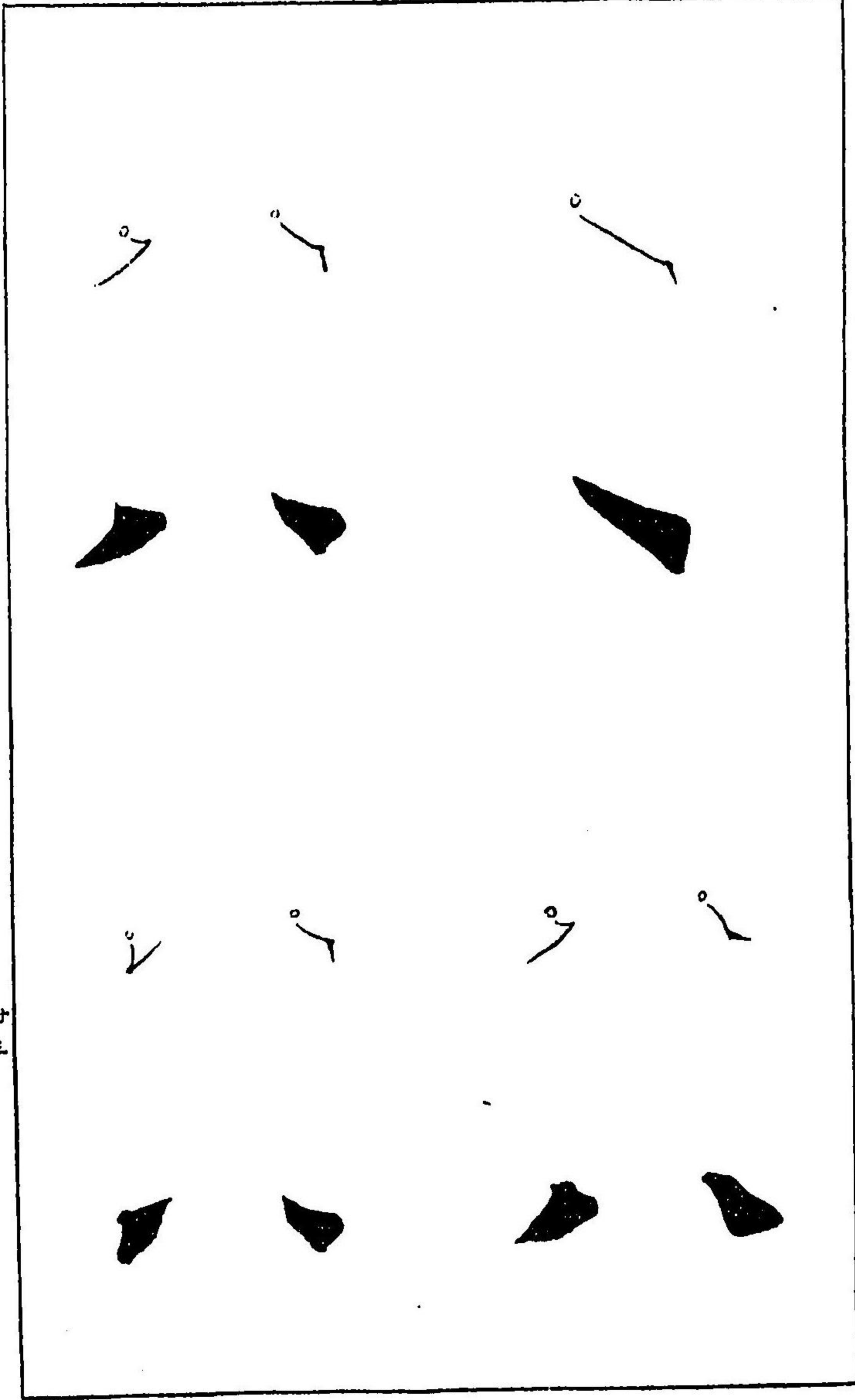
廿九

共ニ八分ノ時代ニテ、六朝ノ楷書トハ其趣トテ殊ニシテ居ルモノモ
 多ク有ル故ニ何モ蚊モ石ニ擬ラナケレバ成ラヌト云フ譯ケニ行キ
 マセヌ、六朝書ヲ學ブニハ是非トモ六朝書ノ點畫ニ就テ其運筆法ヲ
 求メネバナラヌ、ケ前ニ述ベレ如ク六朝時代ノ書ヒ一様ヲ無イ、其
 内ノ古キモノニテ筋骨ノ空ナル書ノ點畫ニ就テ運筆法ヲ搜リ以テ
 六朝楷法ノ階梯トシマス、而レテ上ニ揭グル細線ハ松ノ骨法ヲ示レタ
 ルモノニテ即チ其細線ノ如ク筆鋒ヲ運用スルトキ下ノ點畫ヲ作ル
 コトガ出来マス、然レテ此運筆ハ松ヲ出鋒或ハ露鋒トモ稱シテ起筆ノ
 處ニ筆鋒ヲ露ハスモノデ、顏真卿ノ楷書ナドトハ丸デ筆法ガ違フテ
 居ル、後漢ヨリ隋ニ至ル文字ハ概ネエノ露鋒デ有リマス、殊ニ點體ト
 ドハ唐以後ノ點體トハ大井ニ異ルモノガ有ル故ニ是迄唐以下ノ楷
 書ヲ修メタ人ガ急ニ此ノ書風ニ移ラレタ時ニハ異様ヲ感ガ起ルカ
 モ知レナヒガ其ウ云フ人ハ是迄ノ事ヲ打テ忘レテ研究セネバナリマ
 セヌ、運筆ノ異ルノハ全ク時代ノ異ルノニ原因スルノデス、



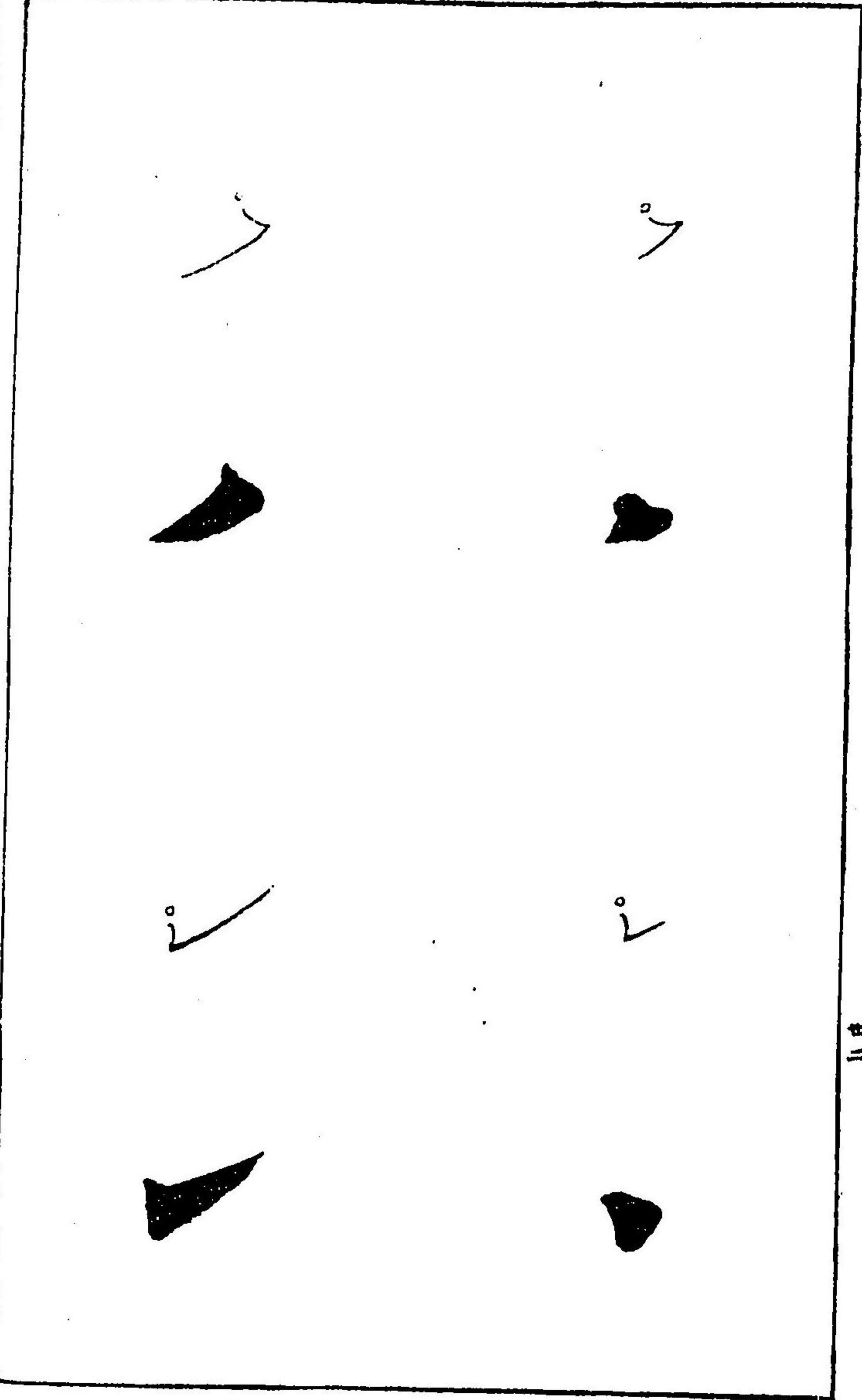
點畫

三
中

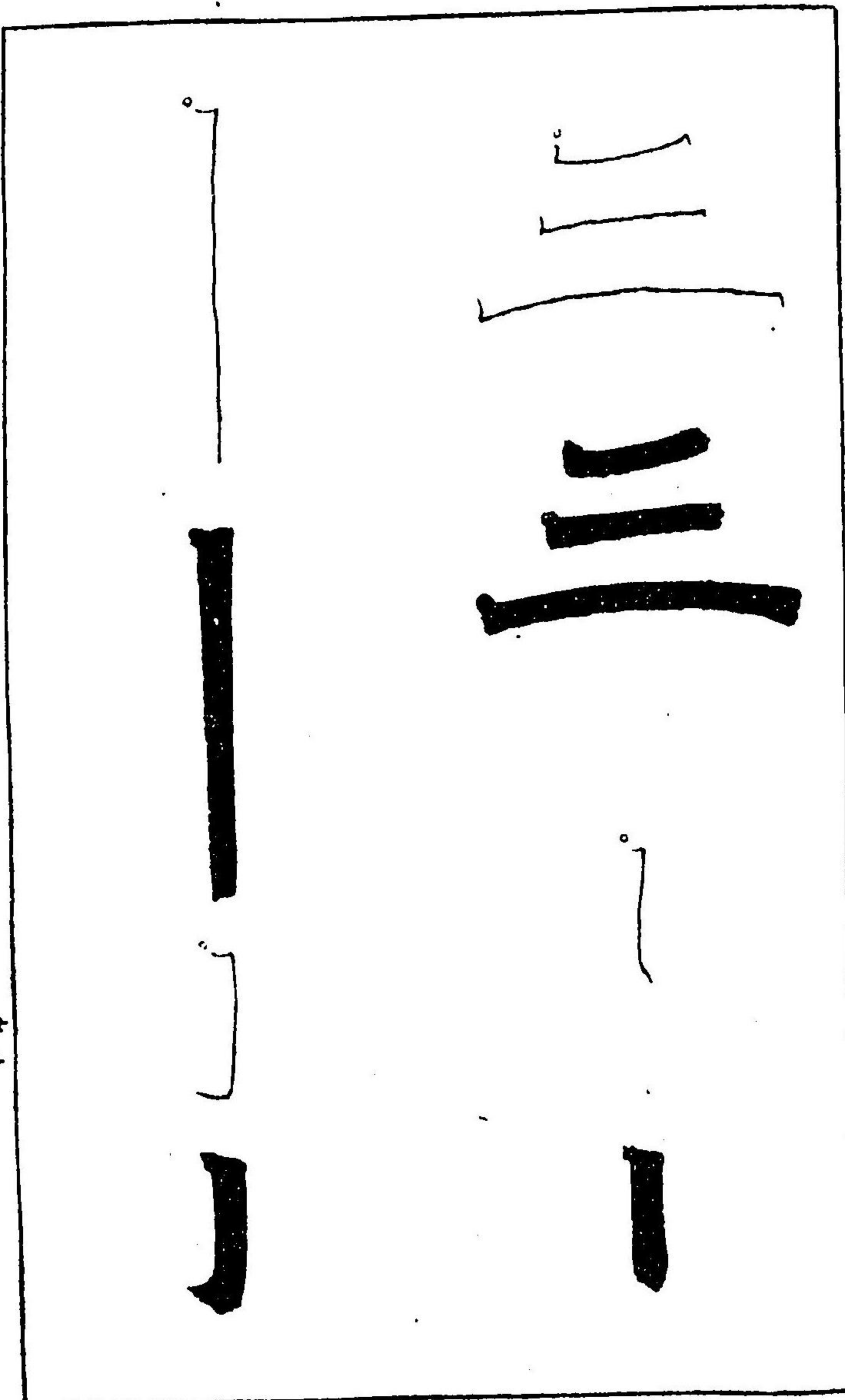


三
中

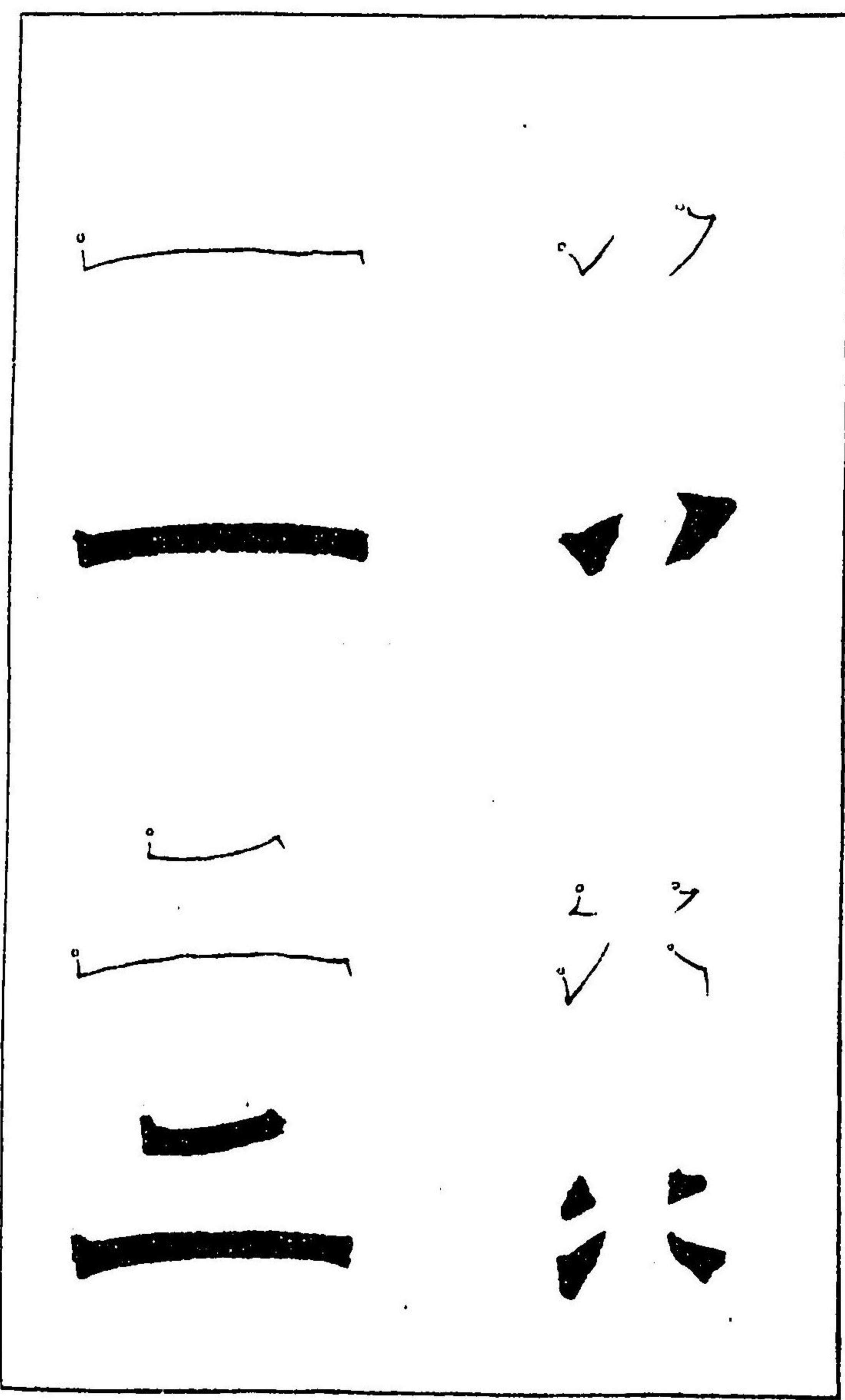
三
中



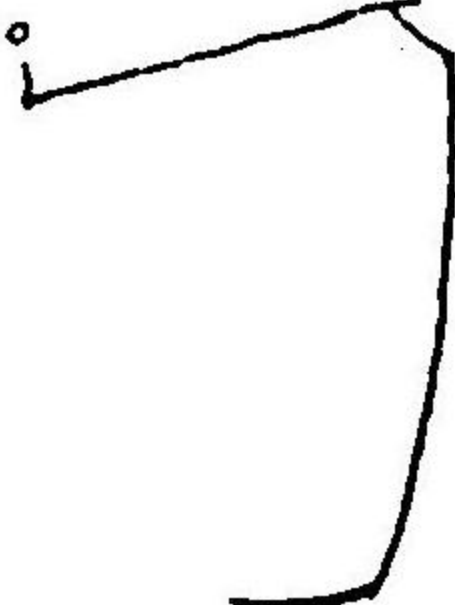

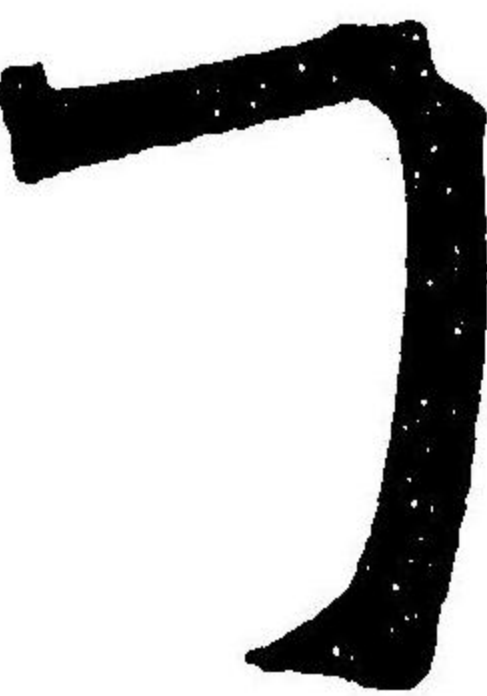

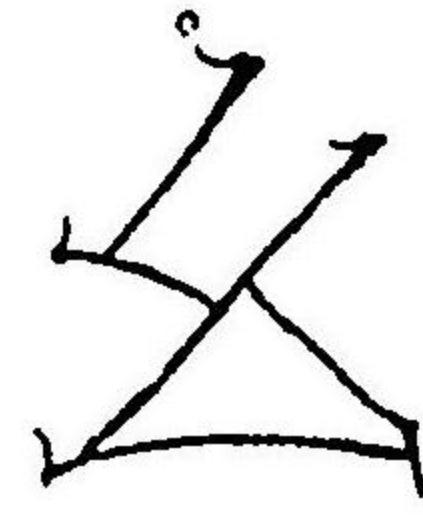
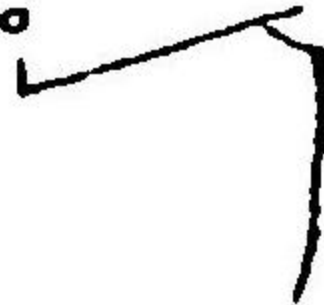


點
畫











折

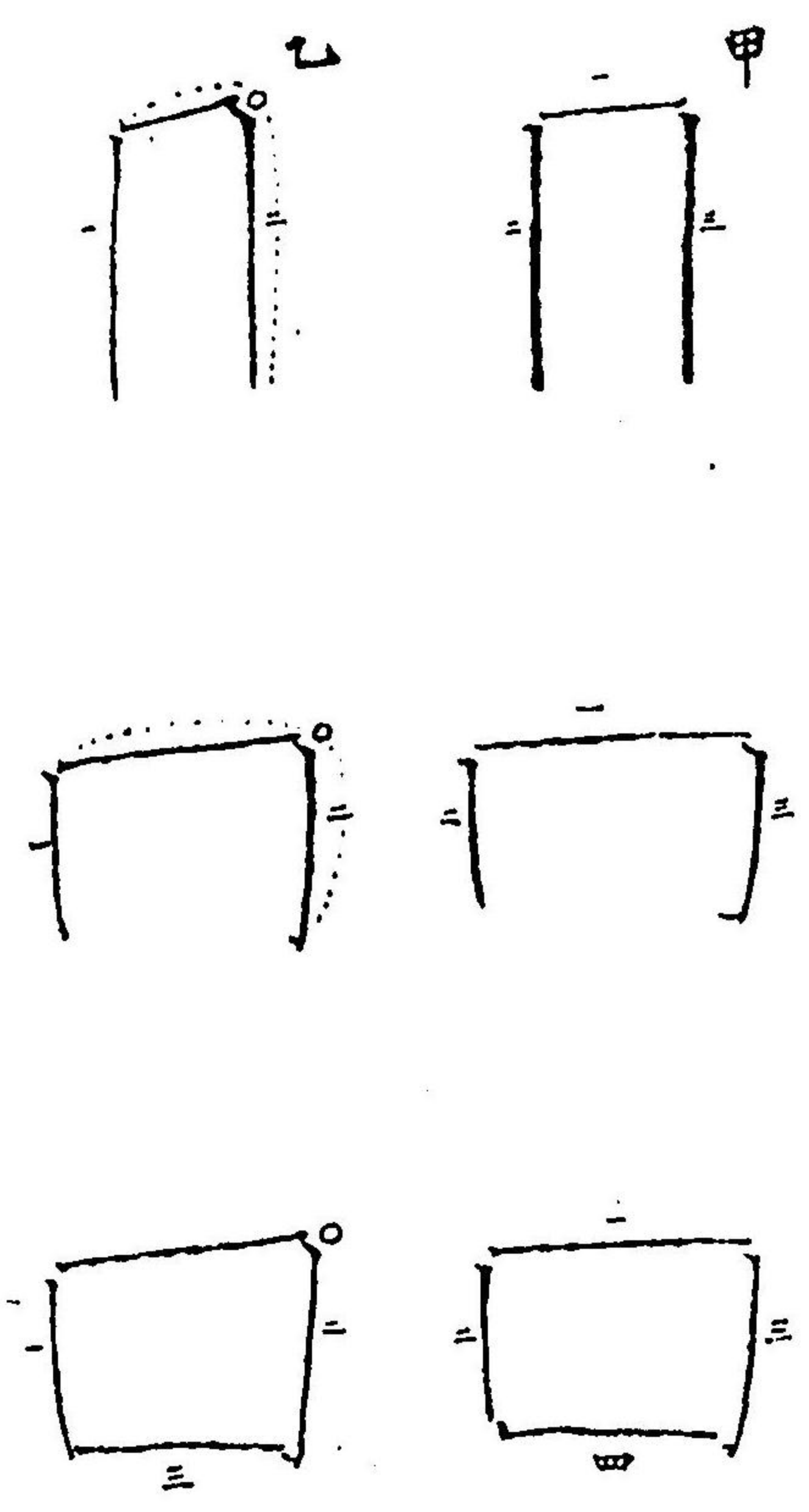


目

右ノ點畫ヲ十分ニ習熟セラル、事ヲ望ミマス、骨法ノ〇ハ起筆ノ處
 ヲ示シタノデアリマス、コノ點畫ハ左程六ツカレク無イト思イマス、但
 注意ヲ要スルコトハ、二點畫以上並ブモノハ各其點畫ノ趣キヲ異ニ
 スル事デアル、例ヘバ二ノ上畫ハ起キ下畫ハ伏シ、三ノ上下畫ハ二ト
 同フレテ中畫ハ平直ニ作ルノ類デス、此ノ變化ガ無キトキハ文字ノ
 生動ヲ失ヒ趣味ナキモノニナリス、又夕一二三一一等ハ一畫數轉
 ノ緩ナル筆法ヲ以テ作りテアルカラ其意ヲ以テ學バレタイ、而シテ
 右點畫ヲ習熟セラタル後ハ左ニ載スル文字ハ自在ニ且ツ立派ニ出
 来ル若デス、故ニ點畫ガ意ノ如ク自在ニ作レル様ニ成ラレタラ、次ギ
 ノ文字ヲ習ヒ給ヘ、
 口口等ノ作り方ニハ、左ニ示ス如ク二様ノ別ガ有ル、初學ニ在リハ甲
 ヲリ入ルガ宜シイ、前ニモ五月蛇述ベレ如ク、書ハ一點一畫ゴトニ筋
 骨ヲ藏セネバ成ラヌ者ユエ、一畫ツ、別ニニ作ルトキハ、其筋骨ヲ失
 フコト無クシテ且ツ作り易イ、



右乙ノ〇ノ處ヲ轉折ト曰フ、コノ轉折ガ初學ノ人ニハ一寸六ツカシイ故
 ニ先ツ甲ヨリ入ルガ宜シイ、八分ハ、總テ甲ノ如ク體ヲ結ブモノニテ
 六朝ノ楷書ニ於テモ古キモノハ甲ノ如ク體ヲ結ビシモノガ多クア
 リマス、

十千上下
廿止丘且

土千午平
半井五立

坐並王主

生羊四白

巾中申甲

市了予手

乎肉丙而

雨南尚尚

白田田面

口日目自

同 罔 勻 旬
旬 弓 卜 乍

斤 片 云 去
玄 告 山 出

右文字ノ骨法ハ双紙ニ載セテ有リマスカラ其双紙ニ直ニ習ハル、カ又ハ双紙ノ上ニ薄キ紙ヲ載セテ習ハル、モ各自ノ随意ニス、然レテ運筆形體共ニ双紙ニ依テ十分出来上リタレバ更ニ他ノ白キ紙ニ手本ノ文字ヲ見テ習フノジス、之ヲ臨書ト曰ヒマス、而レテ双紙ノ骨法ノ上デ習フコトヲ模書ト曰ヒ、模臨ハ支那古来ノ習字法デアルガ、支那デハ多ク手本ノ文字ヲ朱ニテ印刷シ、其朱字ノ上ヲ直ニ墨ニテ模スルノデ有ルガ、然ウスルトキハ真ノ骨法即チ筆鋒ノ起止等ノ趣キガ能ク分ラナシ、故ニ今コレヲ骨法ニ改メ起止及行筆等ヲ分明ナラシメテノジス、模書ナルモノハ運筆及結體等ヲ速カニ知得スルモノニテ習字ノ速成ニ缺ク可カラザルモノデ有ルガ、模書計リテ十分ニ筆力ヲ養フ事ガ出来ナイ、故ニ更ニ又タ白紙ニ手本ノ文字ヲ臨スルノジス、此レガ習字ノ本則デアリマス、

起 伏

前項ニ掲ケタル。十ヨリ且ニ至ル文字ハ一。五ヨリ並ニ至ル文字ハ二。

五ヨリ并ニ至ル文字ハ三字ト縦畫及點體ニ據テ結體セシモノニラ、一ニ属スル横畫ハ秘テ微レ下ニ伏シ、二三ニ属スル横畫ノ上畫ハ上ニ起キ、下畫ハ微レ下ニ伏ス、此レガ一字ニ就テノ起伏ナルコトハ前項點畫ノ部ニ於テ述ベレガ平五立並等ノ文字モ中間ヲ隔テ、起伏

レテ居ルノジス、林韞ガ言ニ

作字若平直相似狀如算子此畫耳非書法也

トアルガ書ハ生動ヲ主トスルモノエ工、起伏ガ無ケレバ生動ノ意ヲ失ヒ、真ノ書ト云フコトガ出来ナイ、若シ縦横ノ畫ガ皆平直デ算子ヲ並べテ様ナ字ハ畫ト云フモノニ止ルノデ或ハコレヲ死版トヒ稱レマス。

照 應

日。日。南。玄。吉。

右日字ノ左偏ガ微シ外ニ向フテ屈レテ居ル故ニ右傍モ亦ク微シ外ニ向フテ屈シテ左右相應シ。曰字ハ其及對テ左偏ガ内ニ向フテ微シ屈レテ居ルカラ右傍モ亦ク内ニ向フテ微シ屈シテ左右相應シ。其レカラ南玄吉ハ上ノ〇ト下ノ〇ノ處トニ中心ヲ取リテ上下相應セシメルニス。此レガ一字ノ照應ニス。結體ニ起伏ト照應ガ取モ肝要デアラス。

以間不容光

ト云フコトガ古人ノ書論ニアルガ體ヲ結ブニハ成レベク内ヲ寬カニシテ畫ト畫トノ間ヲ通ラザル様ニ作り而シテ其寬ナル中ニ自ラ締ガ有リテ光ヲ外ヨリ内ニ容ヌト云フ塩梅ニ作ルノデス。尚ホ結體ニ付テ必要ノ事ハ次ノ卷ニ於テ述ベマス。本編右ニ止メ。次ノ卷ヨリハ漸次簡ヨリ繁ニ入ルノ順序ヲ以テ各種ノ點畫ト結體ヲ載セ。楷法ハ本編ヲ通シテ全部三卷ト為シ。即チ三月ニシテ卒業スルノデスガ。此ノ三月間ニ於テ全部ヲ習得セラルヤ否

ヤハ學者諸君ノ勉不勉ニ在ルノデスガ右三月間ニ習得セラルハ素ヨリ結構ナ事デアリマスガ。其以上ノ望ハ假ヘ半年若クハ一年ヲ費ストレテモ。此書ヲ階梯ト為シテ更ニ六朝ノ古碑ヲ學ビ此レ以上ノ能書家トナラレハ尤モ道人ノ企望スル所デアリマス。但シ本編ハ至テ字數ガ少イガ併シ此少キ點畫及文字ヲ習熟セラルハ第二第三卷ニ至リテ非常ナ働キヲ為スノデアリマス。一字一點畫ガ十字若クハ廿字以上ニモ對スル活動ヲスルノデスカラ其意ヲ以テ十分ニ習熟セラレタイ。

楷法ニ於ケル格ヲノ字數ハ點畫結體ヲ通レテ大約六百字計リアルガ此ノ六百ノ内ニ必要ノ偏傍ハ悉ク之ヲ掲載シテ結體ノ方法ヲ説明シマスカラ。右六百字ヲ習得セラルレハ數千字ニ對スル活用ヲ為スノデアリマス。

附言六朝楷法ヲ學フ用筆ハ温恭堂製ノ鳳舞ト云フ筆ガ適當ニスガ此筆ハ上品佳品精品等ノ數種アリマス。初學ニ在テハ先ツ一

240
44

番價ノ廉ナル筆ヲ用ヒラル、ガ宜シイ。筆ハ價ノ貴クナルニ隨ヒ
モガ軟弱ニナルモノユ。初ノニ高價ノ筆ヲ遣フニハ困難ヲ感ジ
マス。併シ其軟弱ナルモノヲ一ニ月モ遣ヒ込ハト非常ニ善クナル
ガ。初學者ニハ此遣ヒ込ミト云フコトガ中ニ六ツカレイ。故ニ先ヅ廉
價ナル筆ヲ用ヒ漸次高價ノモノニ移ラル、ガ宜シイ。

五十二

書 訣 第一編 第一卷 尾

明治四十二年三月五日印刷
明治四十二年三月十七日發行



發售所

西 東 書 房

東京市神田區佐久間町一丁目一番地
電話下谷七〇六番
板橋口座七七番

著 作 者

默 鳳 前 田 圓

發 行 兼 印 刷 者

七 條 澄

發 行 所

書 道 振 興 會

印 刷 所

金 屬 版 印 刷 合 資 會 社

書 訣 上 冊 附 之 第 一 卷 尾 附
正 價 金 六 拾 錢

240
77

